

注文の多い料理店

宮沢賢治



語り： 二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、ぴかぴかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、あるいておりました。

紳士①：「ぜんたい、ここの山はけしからんね。鳥も 獣 も一疋も居やがらん。なんでも構わないから、早くタンタアーンと、やって見たいもんだなあ。」

紳士②：「鹿の黄いろな横っ腹なんぞに、二三発お見舞いもうしたら、ずいぶん痛快だろうねえ。くるくるまわって、それからどたと倒れるだろうねえ。」

語り： それはだいぶの山奥でした。案内してきた専門の鉄砲打ちも、ちょっとまごついて、どこかへ行ってしまったくらい山の山奥でした。

それに、あんまり山が物凄いので、その白熊のような犬が、二疋いっしょにめまいを起こして、しばらく吠って、それから泡を吐いて死んでしまいました。

紳士①：「じつにぼくは、二千四百円の損害だ」

語り： と一人の紳士が、その犬の眼を、ちょっとかえしてみ言いました。

紳士②：「ぼくは二千八百円の損害だ。」

語り： と、もひとりが、くやしそうに、あたまをまげて言いました。

はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、じっと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云いました。

紳士①：「ぼくはもう戻ろうとおもう。」

紳士②：「さあ、ぼくもちょうど寒くはなったし腹は空いてきたし戻ろうとおもう。」

紳士①：「そいじゃ、これで切りあげよう。なあに^{もと}戻りに、^{きのう}昨日の^{やどや}宿屋で、^{やまどり}山鳥を^{じゅうえん}拾円も^か買って帰ればいい。」

紳士②：「^{うさぎ}兎もでていたねえ。そうすれば^{けっきょく}結局おんなじこった。では^{かえ}帰ろうじゃないか」

語り：ところがどうも^{こま}困ったことは、どっちへ^い行けば^{もと}戻れるのか、いっこうに見当がつかなくなっていました。^{かぜ}風がどうと吹いてきて、^{くさ}草はざわざわ、^こ木の^は葉はかさかさ、^き木はごとなごとなと鳴りました。

紳士①：「どうも^{はら}腹が^す空いた。さっきから^{よこ}横っ^{ばら}腹が^{いた}痛くてたまらないんだ。」

紳士②：「ぼくもそうだ。もうあんまりあるきたくないな。」

紳士①：「あるきたくないよ。ああ^{こま}困ったなあ、^{なに}何かたべたいなあ。」

紳士②：「^た食べたいもんだなあ」

語り：二人の^{ふたり}紳士は、^{しんし}ざわざわ鳴る^{なか}すすきの中で、こんなことを^い云いました。

その時^{とき}ふとうしろを^み見ますと、^{りっぱ}立派な^{いっけん}一軒の^{せいようづく}西洋造りの^{いえ}家がありました。

そして^{げんかん}玄関には

レストラン
西洋料理店
ワイルドキャット ハウス
WILDCAT HOUSE
やまねこけん
山猫軒

という^{ふだ}札がでていました。

紳士①：「君、^{きみ}ちょうどいい。ここはこれでなかなか^{ひら}開けてるんだ。^{はい}入ろうじゃないか」

紳士②：「おや、こんなところにおかしいね。しかしとにかく^{なに}何か^{しょくじ}食事ができるんだろう」

紳士①：「もちろんできるさ。^{かんばん}看板にそう書いてあるじゃないか」

紳士②：「はいろいろじゃないか。ぼくはもう^{なに}何か^た喰べたくて^{たお}倒れそうなんだ。」

* * *

語り：二人は^{ふたり}玄関に^{げんかん}立ちました。^{しろ}玄関は^{せと}白い^{れんが}瀬戸の^く煉瓦で^{じつ}組んで、^{りっぱ}実に立派なもんです。

そして^{がらす}硝子の^{ひら}開き^ど戸がたって、そこに^{きんもじ}金文字でこう書いてありました。

「どなたもどうかお入りください。決してご遠慮はありません」

二人はそこで、ひどくよろこんで言いました。

紳士①：「こいつはどうだ、やっぱり世の中はうまくできてるねえ、きょう一日なんぎしたけれど、こんどはこんないいこともある。このうちは料理店だけれどもただでご馳走するんだぜ。」

紳士②：「どうもそうらしい。決してご遠慮はありませんというのはその意味だ。」

語り：二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。その硝子戸の裏側には、金文字でこうなっていました。

「ことに肥ったお方や若いお方は、大歓迎いたします」

二人は大歓迎というので、もう大よろこびです。

紳士①：「君、ぼくらは大歓迎にあたっているのだ。」

紳士②：「ぼくらは両方兼ねてるから」

語り：ずんずん廊下を進んで行きますと、こんどは水いろのペンキ塗りの扉がありました。

紳士①：「どうも変な家だ。どうしてこんなにたくさん戸があるのだろう。」

紳士②：「これはロシア式だ。寒いとこや山の中はみんなこうさ。」

語り：そして二人はその扉をあけようとしますと、上に黄いろな字でこう書いてありました。

「当軒は注文の多い料理店ですからどうかそこはご承知ください」

紳士①：「なかなかはやってるんだ。こんな山の中で。」

紳士②：「それあそうだ。見たまえ、東京の大きな料理屋だって大通りにはすくないだろう」

語り：二人は云いながら、その扉をあけました。するとその裏側に、

「注文はずいぶん多いでしょうがどうか一々こらえて下さい。」

紳士①：「これはぜんたいどういうんだ。」

語り：ひとりの紳士は顔をしかめました。

紳士②：「うん、これはきっと注文があまり多くて支度が手間取るけれどもごめん下さいということだ。」

紳士①：「そうだろう。早くどこか室の中にはいりたいもんだな。」

紳士②：「そしてテーブルに座^{すわ}りたいもんだな。」

* * *

語り：ところがどうもうるさいことは、また扉^とが一つありました。そしてそのわきに鏡^{かがみ}がかかって、その下^{した}には長い柄^{なが}のついたブラシが置^おいてあったのです。

扉^とには赤^{あか}い字^じで、
「お客^{きやく}さまがた、ここで髪^{かみ}をきちんとして、それからはきものの泥^{どろ}を落^{おと}してください。」
と書いてありました。

紳士①：「これはどうも尤^{もつとも}だ。僕^{ぼく}もさっき玄関^{げんかん}で、山^{やま}のなかだとおもって見^みくびったんだよ」

紳士②：「作法^{さほう}の厳^{きび}しい家^{うち}だ。きっとよほど偉^{えら}い人^{ひと}たちが、たびたび来^くるんだ。」

語り：そこで二人^{ふたり}は、きれいに髪^{かみ}をけずって、靴^{くつ}の泥^{どろ}を落^{おと}しました。

そしたら、どうです。ブラシを板^{いた}の上^{うへ}に置^おくや否^{いな}や、そいつがぼうっとかすんで無^なくなって、風^{かぜ}がどうっと室^{へや}の中^{なか}に入^いってきました。

二人^{ふたり}はびっくりして、互^{たが}いによりそって、扉^とをがたんと開^あけて、次^{つぎ}の室^{へや}へ入^{はい}って行^いきました。
早く何^{はや}か暖^ないものでもたべて、元^{げん}気^きをつけて置^おかないと、もう途^と方^{ほう}もないことになってしまうと、二人^{ふたり}とも思^{おも}ったのでした。

扉^との内^{うち}側^{がわ}に、また変^{へん}なことが書^かいてありました。

「鉄^{てつ}砲^{ぽう}と弾^{たま}丸^まをここへ置^おいてください。」

見^みるとすぐ横^{よこ}に黒^{くろ}い台^{だい}がありました。

紳士①：「なるほど、鉄^{てつ}砲^{ぽう}を持^もつてものを食^くうという法^{ほう}はない。」

紳士②：「いや、よほど偉^{えら}いひとが始^し終^{しゅう}来^きているんだ。」

語り：二人^{ふたり}は鉄^{てつ}砲^{ぽう}をはずし、帯^{おび}皮^{がわ}を解^といて、それを台^{だい}の上^{うへ}に置^おきました。

また黒^{くろ}い扉^とがありました。

「どうか帽^{ぼう}子^しと外^{がい}套^{とう}と靴^{くつ}をおとり下^{くだ}さい。」

紳士①：「どうだ、とるか。」

紳士②：「仕方^{しかた}ない、とろう。たしかによっぽどえらいひとなんだ。奥^{おく}に来^きているのは」

語り：二人は帽子とオーバーコートを釘にかけ、靴をぬいでべたべたあるいて扉の中にはいりました。
扉の裏側には、

「ネクタイピン、カフスボタン、眼鏡、財布、その他金物類、
ことに尖ったものは、みんなここに置いてください」
と書いてありました。扉のすぐ横には黒塗りの立派な金庫も、ちゃんと口を開けて置いてありまし
た。鍵まで添えてあったのです。

紳士①：「ははあ、何かの料理に電気をつかうと見えるね。金気のものはいない。ことに尖った
ものはいなくてこう云うんだろう。」

紳士②：「そうだろう。してみると勘定は帰りにここで払うのだろうか。」

紳士①：「どうもそうらしい。」

紳士②：「そうだ。きっと。」

語り：二人はめがねをはずしたり、カフスボタンをとったり、みんな金庫のなかに入れて、ぱちん
と錠をかけました。

* * *

すこし行きますとまた扉があって、その前に硝子の壺が一つありました。扉には斯う書いてあり
ました。

「壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。」
みるとたしかに壺のなかのものは牛乳のクリームでした。

紳士①：「クリームをぬれというのはどういうんだ。」

紳士②：「これはね、外がひじょうに寒いだろう。室のなかがあんまり暖いとひびがきれるか
ら、その予防なんだ。どうも奥には、よほどえらいひとがきている。こんなとこで、案外ぼくら
は、貴族とちかづきになるかも知れないよ。」

語り：二人は壺のクリームを、顔に塗って手に塗ってそれから靴下をぬいで足に塗りました。それで
もまだ残っていましたから、それは二人ともめいめいこっそり顔へ塗るふりをしながら喰べました。

それから大急ぎで扉をあけますと、その裏側には、
「クリームをよく塗りましたか、耳にもよく塗りましたか、」
と書いてあって、ちいさなクリームの壺がここにも置いてありました。

紳士①：「そうそう、ぼくは耳には塗らなかった。あぶなく耳にひびを切らすとこだった。
ここの主人はじつに用意周到だね。」

紳士②：「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か喰べたいんだが、
どうも斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」

語り：するとすぐその前に次の戸がありました。

「料理はもうすぐできます。

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶の中の香水をよく振りかけてください。」

そして戸の前には金ピカの香水の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちゃぱちゃ振りかけました。

ところがその香水は、どうも酢のような匂いがするのです。

紳士①：「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだろう。」

紳士②：「まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ。」

語り：二人は扉をあけて中にはいりました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう。お気の毒でした。

もうこれだけです。どうかからだ中に、壺の中の塩をたくさん

よくもみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどというこんどは二人ともぎょっと
してお互にクリームをたくさん塗った顔を見合えました。

紳士①：「どうもおかしいぜ。」

紳士②：「ぼくもおかしいとおもう。」

紳士①：「沢山の注文というのは、向うがこっちへ注文してるんだよ。」

紳士②：「だからさ、西洋料理店というのは、ぼくの考えるところでは、西洋料理を、来た人に
たべさせるのではなくて、来た人を西洋料理にして、食べてやる家とこういうことなんだ。
これは、その、つ、つ、つ、つまり、ぼ、ぼ、ぼくらが……。」

語り：がたがたがたがた、ふるえだしてもうものが言えませんでした。

紳士①：「その、ぼ、ぼくらが、……うわあ。」

語り：がたがたがたがたふるえだして、もうものが言えませんでした。

紳士②：「にげ……。」

語り：がたがたしながら一人の紳士はうしろの戸を押そうとしましたが、どうです、戸はもう一分も動きませんでした。

* * *

奥の方にはまだ一枚扉があって、大きなかぎ穴が二つつき、銀いろのホークとナイフの形が切りだしてあって、

「いや、わざわざご苦労です。

大へん結構にできました。

さあさあおなかにおはいりください。」

と書いてありました。おまけにかぎ穴からはきよろきよろ二つの青い眼玉がこっちをのぞいています。

紳士①：「うわあ。」

語り：がたがたがたがた。

紳士②：「うわあ。」

語り：がたがたがたがた。

ふたりは泣き出しました。

すると戸の中では、こそそここんなことを云っています。

店員①：「だめだよ。もう気がついたよ。塩をもみこまないようだよ。」

店員②：「あたりまえさ。親分の書きようがまずいんだ。あすこへ、いろいろ注文が多くてうるさかったでしょう、お気の毒でしたなんて、間抜けたことを書いたもんだ。」

店員①：「どっちでもいいよ。どうせぼくらには、骨も分けてくれやしないんだ。」

店員②：「それはそうだ。けれどももしここへあいつらがはいつて来なかったら、それはぼくらの責任だぜ。」

店員①：「呼ぼうか、呼ぼう。おい、お客さん方、早くいらっしやい。いらっしやい。いらっしやい。お皿も洗ってありますし、菜っ葉ももうよく塩でもんで置きました。あとはあなたがたと、菜っ葉をうまくとりあわせて、まっ白なお皿にのせるだけです。はやくいらっしやい。」

店員②：「へい、いらっしやい、いらっしやい。それともサラダはお嫌いですか。そんならこれから火を起してフライにしてあげましょうか。とにかくはやくいらっしやい。」

語り：二人はあんまり心を痛めたために、顔がまるでしゃくしゃの紙屑のようになり、お互にその顔を見合せ、ぶるぶるふるえ、声もなく泣きました。
中ではふっふっとわらってまた叫んでいます。

店員①：「いらっしやい、いらっしやい。そんなに泣いては折角のクリームが流れるじゃありませんか。へい、ただいま。じきもってまいります。さあ、早くいらっしやい。」

店員②「早くいらっしやい。親方がもうナフキンをかけて、ナイフをもって、舌なめずりして、お客さま方を待っています。」

語り：二人は泣いて泣いて泣いて泣いて泣きました。

そのときうしろからいきなり、

「わん、わん、ぐわあ。」という声がして、あの白熊のような犬が二足、扉をつきやぶって室の中に飛び込んできました。鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはううとうなってしばらく室の中をくるくる廻っていましたが、また一声

「わん。」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるように飛んで行きました。

その扉の向うのまっくらやみのなかで、

「にゃあお、くわあ、ごろごろ。」という声がして、それからがさがさ鳴りました。

室はけむりのように消え、二人は寒さにぶるぶるふるえて、草の中に立っていました。

見ると、上着や靴や財布やネクタイピンは、あっちの枝にぶらさがったり、こっちの根もとにちらばったりしています。風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

犬がふうとうになって戻ってきました。

そしてうしろからは、

「旦那あ、旦那あ、」と叫ぶものがあります。

二人は俄に元気がついて

紳士①：紳士②：「おおい、おおい、ここだぞ、早く来い。」

語り：と叫びました。

蓑帽子をかぶった専門の猟師が、草をざわざわ分けてやってきました。

そこで二人はやっと安心しました。

そして猟師のもってきた団子をたべ、途中で十円だけ山鳥を買って東京に帰りました。

しかし、さっき一ぺん紙くずのようになった二人の顔だけは、東京に帰っても、お湯にはいっても、もうもとのとおりにありませんでした。

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫](http://www.aozora.gr.jp/) (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。